「皇后の月経に重ならないよう注意」昭和天皇の「母」と「妻」に対する認識の落差があまりにも大きかった理由

2024　1/2(火) 6:13

初代宮内庁長官の田島道治が 1949（昭和 24）年から 53 年まで昭和天皇とのやりとりを記録した「拝謁記」を中心とする『昭和天皇拝謁記』（全 7 巻）が、岩波書店より刊行された。

天皇は母と妻をどう見ていたのか

天皇の肉声が生々しく記録されたこの史料は、天皇研究者の間に大きな反響を呼び起こした。これまで全く知られていなかった昭和天皇の等身大の姿が活写されていたからだ。各巻の巻末には編者による丁寧な解説が付され、読者への導き手になっている。

だがもちろん、解説が『拝謁記』のポイントにすべて触れているわけではない。ここでは従来あまり注目されてこなかった昭和天皇の言葉を通して、天皇が母である皇太后節子（さだこ）（貞明皇后）と妻である皇后良子（ながこ）（香淳皇后）をどう見ていたかを探ってみたい。

昭和天皇は皇太后を「おたゝ様」ないし「大宮様」、皇后を「良宮（ながみや）」と呼んでいる。両者への言及回数を比べてみると、皇太后のほうがはるかに多い。その過剰さは田島道治を狼狽させ、「陛下の大宮様に対する御批評、田島に御馴染深くなりし為か、露骨の事多くなる。（中略）御母子としては如何」（50 年 12 月 18 日）と思わせるほどになる。

まず注目すべきは、天皇が戦争末期に激化した米軍の空襲を回想する 50 年 7 月 14 日の次の発言だろう。

天皇の重大な発言

「大宮御所を焼き、又沼津本邸を焼き、米国飛行士の話では、私の安心上早く終戦にする為との風説があつたが、単に風説ともいへぬ」

「大宮御所」は皇太后の住まい、「沼津本邸」は皇太后が 41 年から 42 年にかけて約 1 年間疎開した沼津御用邸本邸を意味する。前者は 45 年 5 月の空襲で、後者は同年 7 月の空襲で焼失した。5 月の空襲では宮城の明治宮殿も焼失したが、これは類焼であって宮殿自体が標的とされたわけではなかった。

天皇はこう言っているのだ。**米軍が大宮御所や沼津御用邸を標的としたのは、戦争の継続にこだわっていた皇太后を狙い撃ちにすることで天皇を安心させ、戦争を終わらせるためだったという風説**があった。これを単なる風説とすべきかと言えば、そうでもない。あながち間違っていないからだ。

重大な発言である。拙著『昭和天皇』や『皇后考』などで指摘したように、**戦勝を祈り続ける皇太后と天皇との間に確執**があったことは確かだ。ここでは天皇が、そうした皇太后の姿勢を米軍も察知していたととらえている。

注目すべき「神罰」という言葉

しかし天皇自身も 42 年 12 月に伊勢神宮に参拝して戦勝を祈願し、45 年になってもなお「一撃講和論」に固執し続けたように、皇太后の影響を受けていないとは言えなかった。それを思わせるのが、50 年 9 月 18 日の次の発言である。

「神道に副（そ）はぬ事をした為に神風は吹かず、敗戦の神罰を受けたので皇太神宮に対する崇敬の念を深くした」　「皇太神宮」は皇大神宮、すなわちアマテラス（天照大御神）をまつる伊勢神宮内宮を指す。「神道に副はぬ事をした」は 42 年 12 月の戦勝祈願を意味する。天皇は「平和の神」であるはずのアマテラスに戦勝を祈ったことを反省しているのだが、注目すべきは「神罰」という言葉が使われていることだ。

この言葉はもともと皇太后が使っていた。枢密院議長だった倉富勇三郎の日記には、**皇太后が天皇に「形式的ノ敬神ニテハ不可ナリ。真実神ヲ敬セザレバ必ズ神罰アルベシ」と警告した言葉**が収められている。「敬神」の念が強かった皇太后が、天皇の態度に満足していなかったということだ。

しかしここでは、天皇自身が敗戦の原因をアマテラスによる「神罰」に求めているのである。**皇太后に感化されて心から神に祈るようになった結果、皇太后の思考そのものが天皇に乗り移ったように見えなくもない**。

皇太后の「御機嫌」をうかがう天皇

天皇は戦後もなお皇太后を恐れていた。皇后が戦時服である「宮廷服」を着続けることに天皇は反対し、「日本服」に着替えるべきだと考えていたが、「日本服についておたゝ様が御反対故、何ともいひ出しかね」（50 年 6 月 21 日）た。皇太后は「所謂虫の居所で同じことについて違つた意見を仰せになることがある」（同年 1 月 6 日）から、「御機嫌のおよろしい時に今一度伺つたらどうだらう」（同年 10 月 9 日）とも話している。**皇太后を恐れる気持ちは、皇后も同じ**だった。こんな些細な宮中の改革すら「御機嫌」をうかがわねばならなかったのだ。**皇太后に対する天皇の過剰な物言いは、その裏返し**でもあった。

皇太后とは対照的に、皇后に対する天皇の言及は驚くほど少ない。その実例を二つほど挙げてみよう。
「皇后様の御機嫌伺ふ。少し熱がまだあるが月のものが減とのことだとの仰せ」（50 年 2 月 7 日）　「四月六、七日からの事で参拝となると良宮の方が都合がいゝかどうか、近頃は殆どないからいゝと思ふが其点日取を……、まアいゝだらう」（53 年 12 月 15 日）
前者の「月のもの」は月経を指す。後者の「近頃は殆どない」は月経がほとんどないことを意味する。

「母」と「妻」に対する認識の落差

天皇が皇后の月経の周期を気にしているのは、宮中に血のケガレを忌むしきたりがあるからだ。皇后は月経になると祭祀に出られず、伊勢神宮の参拝もできない。後者の「参拝」は、54 年 4 月に予定された神宮参拝を指している。**天皇は田島に、皇后の月経に重ならないよう注意を促し**ているのだ。

女性の身体に関するきわめて**私的な話題が公然と語られ、その情報が宮中で共有**される。天皇は皇后を一人の人間としてよりはむしろ、生物学者の視点で見ているかのようだ。**天皇にとって、「母」と「妻」に対する認識の落差は、あまりにも大**きかった。

◆このコラムは、政治、経済からスポーツや芸能まで、世の中の事象を幅広く網羅した『 文藝春秋オピニオン 2024 年の論点 100 』に掲載されています。